

十種燕石

奴

佩

初輯

十

1	借	4
6	7	9
9		



奴師方之目錄

やつおたこ

針うねる

莫うたが勺

卯雲うねる首希ふ松平

全在歌

狂歌合の娘希徳所大人弄花集の序

木綱の狂歌合

宝合の記

華字若多事

花林抄

礪川

全猫館猫并北船司但槃縁

大橋三ツま

十九日并山猫

全在歌并蓮華合

撰序古角の發句

全瓶を叙し狂歌

狂歌合の序

其花江の狂歌并狂合の序

五山宗抄

撰序を序多事

福壽州

富々岡并去り方川

渡宗のそと

志やちほふ

牛門の四友

天何調在歌集の娘

若菜集

入花の娘并木細黒人西子伴

物産舎の娘并平賀原内宿

邦又名口の唐

十八羅漢並十八七しげ

茶店の般易面

温純の胡撒舟拾換の衣

を穿り子○希天おとよ ○折富

長崎初年の行程并稻荷のちり

聖堂再建並分向

鬼状頭

東江先生戯作の虫

萬載集

狂歌并摺物の娘

茶妓の訓

日本魚譜。風来山人戯作の虫

同文勺の評

何のそ程右血のちり

著者振舞

藝者肩の振袖

何一方

抄りて子年

客人拾現

うねり

舟屋の述懐の狂歌

七飯の羽織

五のほろ

加保信士

明山先生懐旧の狂歌

以上

遠近の宮並三つのみや

石のそとす并天左のち

長崎一の相類

少杉屋百巻の著者

文武丸

品川喜樓の甚定日并懐失

庚子寺のちり

奴たふ



奴師 勞之

三ツ流

やつたふを式多たふの形をうけて足をも尻底も志たふも
是ハ安永の始りし出書たり其比本堂卯雪 二種本卯雪
右白雲齋

祭句なり 初年卯也白狐天もやつたふと

夏より比枝豆を何りま形うら管ふを明和より初三つたふ

築出の新出書一時の形を誰れら向ふ

冬より形く夏を牛所の古くみる也

橋新先生 内山
所居の在歌

大橋の何る片ありこりけたゆ也

形くや中 何ふゆくほやこまん

此物をもこまの信永所居つく雁川の谷をの括と大工の何ふ
十九年卯の書書の如くは川を流る朱鳥落江 山崎 著月
下の大抵所實をうら少布ふたり是年所の実録形

此の西行の
原へは志し
るは柳のけしき
も多社なま
なれとて
なせ

卯雲狂歌

狂歌を
全

おふまをまりて 柳をいふ時卯雲たふし柳をいふまをまりて
白きよきまを氣く所發句の形をいふを問ふれふまをまりて
立の筆をいふ筆のまをまりて

志をいふて日く柳をいふて柳をいふて
柳をいふて柳をいふて柳をいふて柳をいふて

卯雲久しき小若徒他を氣し時年老を駭かす柳をいふて
れをも急く駭かす我非れを著し商の以ふ柳をいふて
此歌執政の所別望ふまをまりて柳をいふて柳をいふて
卯雲の狂歌を集ふまをまりて柳をいふて柳をいふて

卯雲の狂歌を集ふまをまりて柳をいふて柳をいふて
卯雲の狂歌を集ふまをまりて柳をいふて柳をいふて
卯雲の狂歌を集ふまをまりて柳をいふて柳をいふて

狂歌を
全

卯雲の狂歌を集ふまをまりて柳をいふて柳をいふて
卯雲の狂歌を集ふまをまりて柳をいふて柳をいふて
卯雲の狂歌を集ふまをまりて柳をいふて柳をいふて

卯雲の狂歌を集ふまをまりて柳をいふて柳をいふて
卯雲の狂歌を集ふまをまりて柳をいふて柳をいふて
卯雲の狂歌を集ふまをまりて柳をいふて柳をいふて

卯雲の狂歌を集ふまをまりて柳をいふて柳をいふて
卯雲の狂歌を集ふまをまりて柳をいふて柳をいふて
卯雲の狂歌を集ふまをまりて柳をいふて柳をいふて

卯雲の狂歌を集ふまをまりて柳をいふて柳をいふて
卯雲の狂歌を集ふまをまりて柳をいふて柳をいふて
卯雲の狂歌を集ふまをまりて柳をいふて柳をいふて

卯雲の狂歌を集ふまをまりて柳をいふて柳をいふて
卯雲の狂歌を集ふまをまりて柳をいふて柳をいふて
卯雲の狂歌を集ふまをまりて柳をいふて柳をいふて

福洲序文

宝合

又とてのまやく暮にやちと是れ「朱柳」の字を切ふる事、
其れに比我やましくも人酒のしく以願ふ新程の終る我の
とむやう何れも其れに書しを始まは
市谷左内板の居る島田内酒をたしとて酒あき男とき在
居る酒上熟藤やうふ安永二年宝合をてふ蔵を形して在又を
やうとて何れも牛止原所惠光寺の禮義の何れ一時此の院
を何れと宝合を形せ一時是時宝物をいしれをきうて意光
寺ふまひいらん皆人まふの宝物や思ひてくやと愛せしふ
何れ何れも形れ何れもいしてえらしと何れも此宝合を
一卷市谷左内板富田を新多南 津南堂といふ
程名を安雅 板乃りて世の俗
やんふ此中ましく形其のち王能三年安の事奉行秋為輕
有為程のまは内居りて宝合を形せし年三笑を何れ
已分若かりし頃と無宗并一更てはとあり大久保外山居る

無宗并

樂三三三南

伊予の周半の者
徳公より持領の根

門外勝批お盤拵せしと存の務系なるし不の鬼家も植何れしを元
あり事と 内山先生を
この形にたす 其後麻布本木の根布を何れしを元何れは
おろしとて 吹山 何れも植るれ其後四若方市産の色は田毎の岡も根
をとりとたりしとて不ふ何れも早れくはかの大久保も何れしと四若の岡
りしとてとて麻布もいしとて秋月産の布もいしとて形も何れしと
也世秋月産の布も無宗并の まつ 書を合ひしとて味ひしとて美之見
養子もいしとて何れも形も何れも其後麻布の根布も何れ
山岸もいしとて何れも形も何れも其後麻布の根布も何れ
とていしとて何れも形も何れも其後麻布の根布も何れ
明和の比也若ふ其書も老を南せしとて根布を何れも其書も何れも
内山先生も其書も其書も何れも形も何れも其書も何れも其書も何れも
うり何れも 若ふ南揚柳養子
其れをいしとて
深井も根布も何れも其書も何れも其書も何れも其書も何れも其書も何れも
持領せしとて其書も何れも

樹を中より今
たふぬ今月
享保十三年九月

き形多三布を面向云云、唐招きふ布と其のち尋ね見れ共木
もいつちゆきらんみえは何を謝り地錦抄つりしものこし其子孫おと
移へて植木も古く形く花を十部の用も存らん八五の形を植木方
しく何りしは是より久しくみきれりしを也

花林抄

地錦抄の外は長生花林抄をいづく傳へて了斗書しものこし
花林のせりし見せし半本をみししをいづく

福壽

福壽をいづく八玉子のいづく一程ありしをいづく葉錦抄をいづく
いづく事いづく

礪川

礪川市お徳の葉錦抄の古文をいづく石川のいづくを礪川市お徳待
人の碑のいづくは是より久しく形をいづく

富田岡

きり

深川八幡を富田岡といづくカ川一カ岡形をいづくといづく
市下川海島寺の堂所といづく古文をいづくいづくいづくいづく
いづくいづくいづくいづくいづくいづくいづくいづくいづく

金猫 熊猫

天明の比まで西多橋の東面向院を高野山を徳寺の院へ堂をいづく金
をいづく金猫といづく或るを銀猫といづくと其比川柳点のいづく

日向院をいづく涅槃の猫も見え

北殿司涅槃像

いづくいづくいづくいづくいづくいづくいづくいづくいづくいづく
いづくいづくいづくいづくいづくいづくいづくいづくいづくいづく

今一開帳を席間禪師のいづく元亨釈古の真蹟
のいづくいづくいづくいづくいづくいづくいづくいづくいづくいづく

慶宗王

おのいづくいづくいづくいづくいづくいづくいづくいづくいづくいづく
いづくいづくいづくいづくいづくいづくいづくいづくいづくいづく

聖堂再建

寶皇政のいづく聖堂を再建いづくいづくいづくいづくいづくいづく
いづくいづくいづくいづくいづくいづくいづくいづくいづくいづく

将門のいづくいづくいづくいづくいづくいづくいづくいづくいづく

又其のいづくいづくいづくいづくいづくいづくいづくいづくいづく

そつひしをうし明和九年の大火西聖堂の孔子の像を劫回す所
解せしむ所ありて近き様馬橋より一丁を隔ててありし所
其くつら形を物種よりせん其比の人等ひ學しき
是にて城門の渡槽の所の時响オカサウハ法華堂の所柿の木の向ひありて
たゞ大坂殿の所柿鬼状頭を向てたる所作事の人より
是を所やして志やちほはら遠むる所を向きたりしと云ふ
し其老人の夫の所を笑ひて骨の内背半合せし時腰より
らをむくありしと云ふし

鬼状頭

秋状字傳の似
タル故語り
べし

元禄の聖堂の事後方より建つて實政の所作事より作ら
れしと云ふや中村七右衛門の所中村七右衛門の所
店內の酒井家の作事奉りたりし大坂殿の地割の上面より
の所持りし其銘圖に鬼状頭を鬼状頭を何れも此様橋の
板本の鬼状頭を何れも鬼状頭を丸より此橋の十の所を

牛門四友

何れも鬼状頭を何れも此様橋の十の所を

明和

初見昌名辨倫堂 菊池角苑名禎堂叔成 形を東に先生を
うて自白其の源を其よりし酒よりし時此た
白馬道人と云ふ醉客より其年の客を志り志ら我ら
少其先を唱へて世し其何れ東に其の臆病形を人形
の何れも又し物實より来りてさるせんはらりや
を云ふる所し其牛門山所の岡部氏の隅月梅より
て又酒よりし其時在待を作れ

初見昌

名辨倫堂

菊池角苑

名禎堂叔成

形を東に先生を

うて自白其の源を其よりし酒よりし時此た
白馬道人と云ふ醉客より其年の客を志り志ら我ら
少其先を唱へて世し其何れ東に其の臆病形を人形
の何れも又し物實より来りてさるせんはらりや
を云ふる所し其牛門山所の岡部氏の隅月梅より
て又酒よりし其時在待を作れ

詩君斜曲背白馬横推車已及戰場必逃帰岡部家

東に先生八十堀丸花梅接り時門人つらと云ふ形より
の命を其岡部と修せし其来りてさるせんはらりや
向氏其の十餘人形より吉原大生よりし其作りし其板本の

異素六帖

狂歌集の始

まず見せらるべきものとして唐詩選の白や百人一首以下の句を合せて
 青楼の事を志す。異素六帖を以てその中を著し。是の形を
 後所へ其形に於て此の端を以て八の字を以て進平とす。此の形は
 為載狂歌集の形に似し。ついで其の形を以ておきけり。

萬載集徳和の集後万載集の形を以て八の字を以て進平とす。此の形は
 其の形を以て進平とす。此の形を以て進平とす。此の形を以て進平とす。

万載集の始

萬載集の始。橋の八衢千歳の形。此の形を以て進平とす。此の形を以て進平とす。此の形を以て進平とす。

狂歌集の始

狂歌集の始。内山先達の形。此の形を以て進平とす。此の形を以て進平とす。此の形を以て進平とす。

狂歌の始

摺物の始

酒の上熟寐。狂歌の形。此の形を以て進平とす。此の形を以て進平とす。此の形を以て進平とす。

入花の始

木阿の形の男。此の形を以て進平とす。此の形を以て進平とす。此の形を以て進平とす。

トミマノ訓
 今名物古本
 或はトミマノ馬
 ヤリエカ

東涯先生の名物古本。此の形を以て進平とす。此の形を以て進平とす。此の形を以て進平とす。

おの初々委々たる予の松下をうやむやの切能く見ゆ
安永六年丙申日光 御社多うの時道平少くも一駐草子下
五荷棒をうやむやの何れ其比駐草子下達摩種よりそのお似て一
はし味をゆききそのお似て三間梁の節をゆきき對こと思ひ
今年一唐尼何々友のそせり武所君御北様又うこの草子
せて五荷棒をうやむやのを賜ふを名にむらう一みりうう布
大しうそ其節もさとおし一未をもてはううたう其形野鄙
形水や四十三年の昔あらうそれ味ふて其比一子青のり先
おら子草子形一駐草子の中おし聖徳をうやむやの形や丹録青
まて新まりり今うたふて一ゆきり

昔駐草子達摩種在永道平陽日光様又長傳
五荷棒大節唱三間梁下
紅屋新後や船橋形も五十棒

品川の飯盛女の煙葉をうやむやの甚定一歳多き事なれり毎年正
月十日の御定形は御守十文を志す又七分を七白
五拾文を定免て西形や三形を志す形を志す何や
んんん西形や一形を志すんんんを三形かむらう
て車も種も御守を通せん然れども古道を天下の大形水
の通せんもせしむらうた青様も御守を志す
をうやむやの車を志す三形より久世先を御守を志す
をうやむやの形を志す曹司若くも十月の御目を志
古御目お比おんし何の會式も御守を志す
正月十日品川宿下りく焼失しその甚定の目お似たり
本宿御守もその様天代支那斗も八百部と言言社門が御守支那も
何れも形を志す

おの品川御守の門の二玉も焼失たりたきその惜也
新吉原京師士女守屋布を志す在名をわは葉元成といふ事

文化六年癸未年四月
九月廿五日
于白山本念寺法号
杏花園心逸日休
居士

とやふ通ひし業を世を辱としてたふすやとく形うま

形うまへを宣ふ辱と知志のまをんくくや見し一年

つらさを恋ししき

古を南面翁乃ちつれおわ水し学稿かて世の事ふ文宣堂
せつるもの片ちんまてりしをゆき形くおわ水所為
と形うてあり何名人せふふつふまふつあまごころて
ゆづり何れんやまをまをりしとさきりし有れを
友多あり其あうつとくし然そつとく補訂しとら
ふらむむたふをせふあおきぬ

侍賢堂主人識

